

韓国における日本学研究のジレンマ

ー日本語学・日本語教育学を中心にー

李 徳奉

(同徳女子大学校)

90年代以来、日本や韓国の学界一角においては、「人文学危機」という談論をよく耳にするようになった。「人文学危機」を招いた原因については、実用性に傾斜していく社会的パラダイムの変化や社会的ニーズに応えられなかったからだという反省の声も高い。そこで社会のニーズに応えられるとともに社会とのコミュニケーションが取れるように様々な工夫が試されている。人文学と社会学の両分野に跨っていて広い意味での人文学に相当する「日本学」の場合も同じような問題を抱えていて、海外においても、いわゆる日本学離れの兆しが見え始めている。本稿では、韓国における日本学研究の実態を踏まえ、人文学危機を乗り越えるために今後改善すべき点について考えて見たい。

1. 韓国における日本学研究の環境

韓国には4年制大学に100以上の日本学関連学科が設けられており、大学院に80近い日本学関連研究コースが設けられているなど研究者の養成環境に恵まれている。また、30以上の日本学関連学会があり、会員数2000人を数える学会があるなど研究人口も少なくない。最も歴史の古い学会誌としては、日本学報（韓国日本学会）があり、1973年8月に創刊され、09年8月現在80号を記録している。日語日文学研究（韓国日語日文学会）は、1979年12月に創刊され8月現在70号を記録している。両学会誌は、年間4回ずつ発行し、年間それぞれ150-200編あまりの論文が載っている。

日本学関連学会誌の中には、韓国研究財団の審査により学術誌としての権威が認められている日本学関連学会誌だけでも30誌に登る。上記の2誌以外に、東北亜歴史論叢、東アジア古代学、比較日本学、日本近代学研究、日本文化研究、日本文化学報、日本思想、日本語教育、日本語教育研究、日本語文学a、日本語文学b、日本語学研究、日本言語文化、日本歴史研究、日本研究a、日本研究b、日本学、日本学研究、日語日文学、韓日関係史研究、外国語教育研究、日本研究論叢、韓国日本教育学研究、韓日経商論集、東北亜文化研究、アジア女性研究、日本研究、韓日民族問題研究などが年2-4回にわたって定期的に発刊されている。その他、研究財団の評価に頼らない日本学関連学会や研究機関の機関誌も少なくない。同日語文研究、漢陽日本学、ハンリム日本学研究などがその例である。その他、人文・社会系の研究機関誌に載っている日本学関連論文も少なくない。このように韓国における日本学関連研究環境は、発表誌

を見る限り十分すぎるほど恵まれていると言える。

研究者の養成においても、修士コースは、70年代後半から博士コースは80年代後半から設立されはじめ、修士コースは、一般大学院・教育大学院を合わせて80あまりのコース、博士コースは30ほどの大学院に日本学関連コースが設けられている。その結果、韓国内における日本学関連博士号取得者は、90年代から急増していて、研究者の養成の点においても活発である。以上のように、韓国における日本学関連学会や研究機関などの研究インフラ構築は、充実していて、研究人力にも恵まれていると言える。

2. 韓国における日本学研究実績の現状

表1は、1945年から1994年に至るまでの韓国の全ての学会誌や大学などの研究所から発刊される研究誌などに発表された日本語学関連記事論文の総数である。全体の日本学関連論文から占める語学系の研究実績は40%弱であることから、45-94年間の日本学関連論文総数の推計は、3000点を越える。一年平均60点の論文が発表されたことになるが、実際は80年代後半から急増している。表2は、97年以降の代表的な5つの学会誌に載っている語学系の研究実績数である。07-08年の編数が1788に登ることから、30を越える全体の学会誌には、少なくとも年間3000点あまりの論文が発表されていると言える。語学の研究者数が増えたことを勘案し、語学の割合を5割にして全体の日本学関連の編数を推計すると、年間6000編余りの実績が発表されたことになる。

表1 > 日本語学関連記事論文の総本数 (1945-1994)

期間	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日本語 教育	計
45-50	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	3
55-64	1	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
65-74	8	0	3	5	0		9	1	7	0	9	42
75-84	24	10	21	53	2	30	26	131	5	2	64	368
85-94	41	45	48	133	16	62	66	602	16	27	174	1230
計	74	57	72	191	18	103	95	740	21	29	247	1647

表2 > 5つの学会誌における最近10年間の分野別論文数 (1997-2008)

年度	分野 人数	文字 表記	音声 音韻	文法	語彙	日本 語史	日本語 教育	社会 言語学	その 他	合計	一人当り の論文数
1997~1998	100		8	52	4	40	24	8		136	1.36
1999~2000	173	3	9	89	15	62	47	16	7	248	1.43
2001~2002	225	4	5	134	29	83	58	30	7	350	1.56

2003~2004	285	6	23	182	45	115	81	39	9	500	1.75
2005~2006	312	6	17	166	66	124	96	55	24	554	1.78
2007~2008	1095	19	62	623	159	424	306	148	47	1788	1.63

結局、韓国における日本学研究者の数と実績の量は、決して少なくないと言える。また、その研究量は年々増えつつあるのである。

3. 日本学研究をめぐる問題点

前章で述べたように韓国における日本学研究の生産性は高い。しかし、研究者どうしの引用率はきわめて低い。国内研究に対する、普及の問題や差別的態度、使用言語などによるものと思える。他の研究分野の研究者はもちろん、同じ日本学関連研究者どうしの引用率も目だつて低い。学会誌などでの使用言語においては、二つの方針による場合がある。一つは、国内の他の分野からの活用に向けて韓国語使用を原則としているところもあれば、日本の研究者との交流のことを考慮し日本語で掲載する場合がある。発刊されている学会誌は、主な図書館には入れているけれども、全体的普及においては十分とはいえない。また、使用言語の混戦により論文単位のデータベース・システムづくりにも影響されるものと思われる。もう一つの問題は、同じ日本学関連研究者どうしの引用率が低いのは、大御所意識によるものではないかと思われる。日本での研究経験のある研究者ほど、日本の参考資料を中心に活用していて、国内の研究情報には目を向けていない場合がある。もしかしたら、日本の研究者たちが海外の研究実績に関心を示していないことに影響されているかも知れない。国語・国文学界の講座制雰囲気による閉鎖的態度によるものかも知れない。その他、韓国における日本が研究をめぐる主な問題点は次の通りであらう。

- 1) 研究分野別偏りが際立つ。
- 2) 専門誌の領域別分類システムができていない。
- 3) 国内研究実績の引用率は低い。
- 4) 国学的研究態度により研究方法の多様性に欠けている。
- 5) 情報化不足による参考資料の限界。
- 6) 細かい専門領域別研究者どうしのネットづくり不足。
- 7) 研究誌の国際的信頼度が証明されていない。

4. 結語：グローバル時代に相応しい日本学研究のあり方

- 1) 国内外に、使用言語に、言語観に、研究領域に、研究方法において開かれた研究。
- 2) 国際的研究協力をより活性化させるような体制づくり。
 - ：国際的ネット作りと研究情報の共有。
 - ：海外大学院や学界どうしのコンソーシアムづくり。
 - ：多言語使用環境の国際的研究会設立や国際的学会誌の発行。

- 3) 日本学関連学問領域分類の標準化。
- 4) 国際的日本学研究実績DBの構築と活用。
- 5) 研究資料の情報化と分類コードの明記。
- 6) 国際的遠隔研究会や遠隔授業の普及と活用。
- 7) 多様な研究対象と方法の開発。
- 8) 研究誌の国際的信頼度を高める。
- 9) 日本語と諸言語間の自動翻訳機の普及。

参考文献

- 李徳奉(1996)「独立後の日本語学研究状況及び課題」『人文科学研究』2.(同徳女子大学)
- 李康民(2000)「韓国における日本語研究(1997-1998)」『日本学報』45.(韓国日本学会)
- 高麗大学日本研究センター編(2009)『2009年度国内日本研究者招請ワークショップ要録』
- 洪ミンピョ(2007)「韓国における日本語教育と研究の概観」『日本文化研究』22.(東アジア日本学会)